

京都大学	博士（文学）	氏名	竹村 はるみ
論文題目	グロリアーナの祝祭—エリザベス一世の文学的表象		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、エリザベス朝文学におけるエリザベス一世像の変遷を分析すると共に、王権・文学・祝祭の三点を基軸として構築されたエリザベス朝特有の文化システムを歴史的に跡づけることを目的とする。エリザベス一世は、半世紀近くにわたって16世紀後半のイングランドを統治し、後の大英帝国の繁栄へと繋がる礎を築いた君主として、現在もなお圧倒的な人気と知名度を誇る。その政治的手腕もさることながら、生涯独身を貫いたことから「処女王」として人々の崇敬を集めたエリザベスのカリスマ性は、ウィリアム・シェイクスピアやエドモンド・スペンサーをはじめとする同時代の文人達の詩的想像力を大いに鼓舞したことでも知られる。エリザベスを賛美するべく量産された文学作品がイギリスのルネサンス期に相当するエリザベス朝の文学的繁栄を促進したと言っても過言ではない。しかし、いわゆる「エリザベス崇拝」と呼ばれる文化現象は決して単純な君主崇拝に終始したわけではなく、そこから立ち現れるエリザベス一世像は実に多くの矛盾を孕んでいる。</p> <p>本論文では、文学がいまだ本来の祝祭性を留めていた時代としてエリザベス朝を位置づけた上で、エリザベス一世に関連した初期近代英文学作品と、ロンドン及び地方で展開した祝祭文化を年代順に取り上げながら、エリザベス表象の変遷を文化的に考察した。具体的には、女王の戴冠を祝してロンドンの街路で催された余興の数々（第一章）、女王の結婚問題やイングランドの外交問題をめぐって議論が紛糾した1560年代から1570年代半ばにかけての祝祭余興や宮廷文学（第二章、第三章）、エリザベスの結婚の可能性が事実上消滅し、処女性定義が大きく変化した1579年の文学作品（第四章）、1580年代以降開花したエリザベス朝騎士道文学（第五章）、同じく1580年代以降本格化したロンドンの劇場文化におけるエリザベス表象（第六章）、女王の高齢化に伴い、その政治的求心力が急速に翳りを見せた1590年代の風刺詩・風刺喜劇（第七章）を多角的に検証した。以下、各章の内容を略述する。</p> <p>まず、序章「「エリザベス崇拝」という神話」では、エリザベス一世の表象をめぐる先行研究を概観しつつ、本論文の目的と研究手法を提示した。エリザベス一世の表象の多義性を考察する際に本論文が特に注目したのは、エリザベス朝イングランドの豊かな祝祭文化である。宗教改革後の初期近代イングランドでは、聖人崇拝を典型とする従来の宗教祝祭や儀式に代わって世俗的かつ娯楽的な祝祭文化が興隆した。中でも、圧倒的な規模を誇ったのは華麗な宮廷祝祭だが、注目に価するのはその公開性である。エリザベス一世の戴冠式の行進に始まり、ガーター騎士団の叙勲式典、毎年盛</p>			

大に催された即位記念日の馬上槍試合、女王の地方巡幸に伴って各地で催された歓迎式典といった宮廷祝祭・余興の数々は、一般公開されることによって、君主のイメージ構築に貢献すると共に、エリザベス朝イングランドの多種多様な文学ジャンルの創出に多大な影響を及ぼした。従来より祝祭研究は王権表象の分析において欠くべからざる領域だったが、祝祭と文学の双方向的な影響関係を実証主義的に再考察した点に本研究の学術的意義がある。

第一章「女王であることの困難」では、1559年のエリザベス一世の戴冠式の行進の際にロンドンの街路で催されたパジェント、行進の模様をいち早く報道したパンフレット『戴冠式の前日におけるロンドン市からウェストミンスターへと至る女王陛下の行進』を取り上げ、女王批判論を巧みにかわし、時にはそれを逆手に取る形で、理想の君主像が構築されていく様子を考察した。そもそも、比喩的な語りや描写を通して道徳的概念を表現する寓意は、ルネサンス期のヨーロッパ人にとっては聖書を通しておなじみの表現様式である。文学の存在意義を「教え、楽しませる」ことに見出すのは、ホラティウスに始まる文学擁護論の王道であるが、わかりにくいことをわかりやすく、伝えにくいことをそれとなく巧く伝えるのは寓意の本領である。言葉を介さずに視覚に訴えることができる寓意を活用した戴冠式の行進のパジェントは、識字率が低い時代に、民衆に対する抜群の訴求力を発揮したものと推測される。

ルネサンス期のヨーロッパにおける宮廷祝祭で寓意が果たした役割は、フランセス・A・イエイツやロイ・ストロングの研究をはじめとしてこれまで盛んに論じられてきた。本論文が特に注目したのは、王権のイメージ形成に寓意が用いられる場合、それが諸刃の刃となりうる点である。初期近代のヨーロッパにおいて、王権のイメージ戦略を王室が管理することはもはや不可能となり、君主の自己成型が限界に達したことは、既に従来 of 批評で指摘されている通りである。新歴史主義批評が詳らかにしたように、王権がスペクタクルとして機能し、その虚構性や演劇性が極度に前景化される時、王はあくまでも主題の一つとなり、多義性は寓意による王権表象の宿命となる。それは一体何を意味するのか、とたえず思考しながら鑑賞し、見かけの裏に隠された意味を探ることを促す寓意は、多層的な意味構造を前提とする。その結果、表面上は君主崇拝を目的とする祝祭であっても、作者や主催者がそこに自らの政治的主張をひそかに織り込むことが可能となる。

その好例の一つとして第二章「求愛の政治学」で着目したのは、法学院という閉鎖的な共同体の中で営まれた祝祭文化である。本章では、法学院祝祭の分析を通して、エリザベス一世がいわゆる結婚適齢期を迎えていた1560年代における女王の表象を考察した。法学院祝祭の出し物は、宮廷祝祭の影響を色濃く受ける一方で、王位継承や外交政策といった政治問題をあえて取り上げ、時に王室や政府に対する批判的な見解を提示する風刺的な傾向を有していた。1561年から翌年にかけて開催されたインナーテンプル法学院のクリスマス祝祭もまた、この系譜に位置づけられる。従来の研究で

は、女王の寵臣ロバート・ダドリー（後のレスター伯）を招待して華々しく開催されたこのクリスマス祝祭は、ダドリーによるエリザベス一世への求婚の文脈で解釈される傾向がある。本章では、この定説には疑義がある点を指摘した上で、唯一の情報源であるジェラルド・リーの『紋章の基礎』を法学院の祝祭文化の観点から考察することにより、余興の寓意に関する再解釈を試みた。未婚の女王の身体をめぐる騎士道ロマンス的な余興は、男性中心主義的な法学院の文脈に置かれると、男性貴族と法学院生の間でとりかわされる極めてホモソーシャルな絆を演出する文化装置となる。女王の存在ははるか遠景へと退き、かわって前景化されるのは、騎士道的エートス、そしてそれによって自己成型を図るレスター伯、法学院それぞれの思惑である。

レスター伯の周囲に形成された文学的コミュニティは、第三章「女王陛下のやんごとなき娯楽」でさらなる考察の対象となっている。本章では、1570年代のエリザベス一世の地方都市への巡幸に焦点を当て、これまであまり研究が進んでいない巡幸録の調査を通して、巡幸に伴う祝祭余興の執筆・出版に携わった軍人詩人の協働体制を明らかにすると共に、これら巡幸録出版の背景には女王の穏健的な宥和政策に対する兵士の不満があったこと、それを取り込むことでネーデルラントへの軍事支援へと繋げるプロパガンダを行ったレスター一派の企図が作用していた可能性が強いこと、の二点を指摘した。本章が特に重点を置いたのは、レスター伯の活動は決して上から下へのパトロン活動ではなく、市民と貴族の互恵的な関係に拠るところが大きい点である。例えば、トマス・チャーチャードが出版したノリッジ巡幸録（『チャーチャードの雑録の第一部』所収）は、祝祭のテキスト化という新しい流れを生み出す契機となり、女王や宮廷貴族のみならず一般読者を観客とする仮想の祝祭空間を出版市場に胚胎した点において、エリザベス朝の祝祭文化の新たな方向性を示している。

第四章「牧歌の女王—最後の結婚交渉とレスター・サークルの反撃」では、エリザベス一世とフランス王太子アンジュー公の結婚交渉をめぐる政治的分裂が深刻化した1579年に焦点を当て、さらに激化するレスター一派の文芸活動の出版文化史的意義を検証すると共に、軍人詩人に代わって台頭したスペンサーやフィリップ・シドニーら人文主義詩人の作品を分析することにより、〈未婚の女王〉から〈非婚の女王〉へとエリザベス一世の処女性が再定義される過程を再構築した。当時レスター伯によって雇用されていたスペンサーが匿名で出版した牧歌詩集『羊飼いの暦』は、女王がレスター伯の邸ウォンステッドを訪れた際に上演されたシドニーの仮面劇『五月の貴婦人』に見られる牧歌風の女王崇拝のレトリックを援用しつつも、それを風刺詩という新しいジャンルへと発展させ、1570年代末期の宮廷政治の緊迫した情勢を巧みに照射する。その際、寓意の多義性は、最大限の効果を発揮する。エリザベスは、一方でイングランドに牧歌的な平和をもたらす君主として称えられながらも、他方では忠臣の奉仕を無にする残酷な君主として慨嘆の対象となる。党派主義的な読みを前提とする寓意は、君主崇拝を装いつつも、それとは全く逆の女王風刺と宮廷風刺を滑り込ませ

る離れ業を可能とするのである。

第五章「ロマンシング・イングランド—エリザベス朝の騎士道ロマンスブーム」は、処女王崇拜の言説が一層の高まりを見せた1580年代から1590年代の時期に焦点を当て、この間に騎士道ロマンスが辿った変遷の過程を明らかにすると共に、その変容がエリザベスの表象を構築する上で及ぼした影響を精査した。エリザベス一世が君臨した16世紀後半は、ヨーロッパ大陸では既に凋落の一途を辿っていた騎士道文学が活気を取り戻す稀有な一時期を形成している。騎士道文学のリバイバルというこのイングランド特有の現象は、女性君主の誕生と密接に連動していた。処女王崇拜に沸く宮廷文化をバックボーンとしてシドニーの『アーケイディア』やスペンサーの『妖精の女王』といった大作がエリート読者層に向けて出版される一方、大衆娯楽に徹した散文の騎士道ロマンスがロンドン市民の間で流行する。そこには、貴族的エリート主義と世俗的娯楽性という騎士道ロマンス文学そのものに内在する二極性が窺えると同時に、宮廷社会と市民社会が物理的にも精神的にも緊密な形で共存していたロンドン特有の文化的土壌を見出すことができる。

宮廷社会と市民社会によって共有される祝祭文化は、同時代の演劇の発展にも寄与する。第六章「芝居小屋の女王様」では、ジョン・リリーの『エンディミオン』やシェイクスピアの『真夏の夜の夢』を宮廷の祝祭文化の文脈で分析した。エリザベス朝イングランドの宮廷演劇は、経費削減のために宮廷余興のアウトソーシング化を目指す宮廷祝典局の方針もあって、商業劇場との連携によって成り立っていた。宮廷演劇がリハーサル上演という名目で私設劇場の観客を楽しませる一方、ロンドンの人気劇団による宮廷上演が常態化する。女王や宮廷貴族とロンドンの民衆が同じ芝居を観劇する特殊な状況は、複数の視点を内在化させることによって、意味レベルの重層化をもたらし、作品の文学的表現力を一気に底上げする。と同時に、エリザベス表象のさらなる拡散・肥大化が促進され、次章で論じる風刺文学の素地が形成されることとなる。

第七章「疲弊する王権と不満の詩学」では、エリザベス一世の政治的・文化的求心力に翳りが見えた1590年代から女王崩御に至るまでの期間を考察の対象とし、最晩年のエリザベス一世の表象を分析した。その際に注目したのが、法学院詩人のサー・ジョン・デイヴィスによる小叙事詩『オーケストラ』である。「ダンスに関する詩」という副題が示唆するように、もともとは法学院の余興のために執筆された可能性も指摘されるほど、『オーケストラ』には祝祭的な要素がふんだんに盛り込まれている。特に注目したのは、エリザベス一世を体現する貞節の王妃ペネロピーに対して鏡を掲げる仮面劇風の趣向である。『リチャード二世』『ハムレット』『シンシアの饗宴』『マクベス』等、君主に対して鏡を向ける所作、あるいはその比喩を取り入れた作品が16世紀末から17世紀初頭にかけて流行したが、1594年初頭には執筆されていたと推測される『オーケストラ』は、この演劇的趣向の最初期の例として位置づけることが

できる。本章では、風刺文学が注目を集めた1590年代においてひときわ存在感を誇った法学院の文芸活動を踏まえつつ、君主が覗く鏡のモチーフに焦点を当てながら、デイヴィスのエリザベス表象の両義性を指摘し、同種の作品傾向がベン・ジョンソンの風刺喜劇『シンシアの饗宴』に継承されている点を指摘した。

終章「祭りの喧噪から文学は生まれる」では、本論文の全体的な構想を総括すると共に、エリザベス一世の表象を構築する上で祝祭と文学が連動する形で果たした役割の重要性を改めて強調し、これを本論文の結論とした。本論文が一貫して追ったのは、エリザベス一世の虚像が構築される複雑なメカニズムである。一見すると君主崇拜に根ざした王権のプロパガンダと思しき作品には、政治的陳情をしたたかに行う宮廷貴族の思惑や、宮廷の腐敗を冷ややかに見つめる市民的倫理観の発露が窺える。それはとりもなおさず、文学が積極的に政治に介入し、社会のあり方を構築し、文化の方向性を規定する上での知的・精神的原動力として機能していたエリザベス朝の精神風土をも浮かび上がらせる。その際に認識されるのは、文学が宮廷社会と市民社会を繋ぐ上で格好の公共メディアとして機能したエリザベス朝祝祭文化の特異性である。文学的な祝祭を通して宮廷文化と市民文化の混淆が生じたエリザベス朝には、実に柔軟で融通無碍な文化受容の在り方が見て取れる。エリザベス朝文学がイギリスのルネサンス期と呼ばれる黄金時代を築くことになった所以は、まさにこの点にある。

「処女王」なる天下無双のキャラクター性を有する君主を戴くイングランドで、祝祭と文学は相互に影響を及ぼし合い、宮廷社会と市民社会の双方を取り込みながら発展する。そして、印刷出版と商業劇場という二つの新手メディアの受け皿を得ることで、祝祭空間は文学的虚構の中に包摂され、エリザベス表象は神話化と脱神話化を繰り返しながら、時代を超えて無限に生産され続ける。王が祭りを生み、祭りが文学を生み、文学が王を生む——エリザベス表象の多義性は、このダイナミックな円環構造の産物だったのだ。

(論文審査の結果の要旨)

エリザベス朝(1558年-1603年)は、16世紀前半に始まる宗教改革に伴う政治的、宗教的混乱が収束し、当時ヨーロッパ大陸におけるカトリック勢力の中心であった大国スペインの無敵艦隊撃破を経て、イングランドがプロテスタントの主導的な国家として立ち現れるだけでなく、エリザベス一世という魅力に富んだ女王の下、イングランド・ルネサンス文化が花開いた時代として、伝統的には肯定的に評価されることが多かった。しかしながら、その一方で、カトリック諸国との抗争が継続し、既に植民地であったアイルランドでは大規模な反乱が発生し、また、インフレーションが昂進するなど、その否定的な側面もまた指摘されている。エリザベス一世に関しても、イングランドに安定と繁栄をもたらした偉大な君主として称揚されるだけでなく、女性君主の歴史的な例外性、男性宮廷人との権力抗争、婚姻に伴う王朝交代の可能性、治世晩年に顕著となった後継者問題といった不安定要素も指摘されており、既に数多くの論考の対象となっている。

本論文は、エリザベス一世を対象とした文学的表象を考察することにより、この時代の文化の特徴を分析する試みである。エリザベス一世は、イングランド・ルネサンスの最盛期に君臨しただけでなく、しばしば同時代の文学作品の主題となり、時には公然と、また時には暗に示す形で言及されることでこの時代の文化に大きな存在感を示している。論者は、エリザベスの文学的表象の成立と変容を、女王の戴冠から晩年までに書かれた多様なジャンルのテキストを取り上げ、詳細に検討することで丹念に辿っているが、特筆すべきは、エリザベス表象を構成する諸要素間の関係をそこから抽出することによって、この時代の文化の特徴の把握に成功している点である。この研究姿勢は、エリザベス朝を含む初期近代英文学研究において特に盛んであった新歴史主義批評の手法に基づくものであるが、論者はこの批評方法のみにとどまらず、国内外における関連先行研究を使いこなしながら、文学研究を基盤とした文化研究の一例を提示している。

本論文の意義は以下の二点に要約することができる。

1) エリザベス朝の文化システムを構成する主要要素の明確化とその分析

本論文は、王権・祝祭・文学という三要素を明確に提示し、エリザベス朝文化がこれら三要素の力学の産物であることを明らかにしている。さらに、戴冠から晩年まで、時間の推移に伴うエリザベス自身と彼女を取り巻く環境の変化を通時的に検討することによって、三要素の相互関係を動的に分析している点が、特に評価に値する。卓越した政治力に裏付けられた圧倒的なカリスマ性を有する一方、結婚をしない「処女王」として異形の君主でもあったエリザベス一世の文学的表象が、これら三要素の相互関係の中でどのように形成され、流通し、変化したかを本論文は明快に論じている。

2) 研究対象となるテキストの多様性

本論文では、フィリップ・シドニー、エドモンド・スペンサー、ウィリアム・シェイクスピアといったこの時代を代表する作家達の作品と同列に、従来の文学研究では周縁的と見なされてきたテキストを検討の対象とすることでエリザベス表象の全体像を探求している。後者には、宮廷や戴冠式、女王の地方巡幸における余興や、法律家養成機関である法学院における余興などの、貴族的エリート文化に属するテキストと、市民層向けの散文ロマンスや騎士道ロマンス劇のような、大衆文化に属するテキストが含まれる。これらのテキストを綿密に検討することで、本論文はそこに投影されたエリザベス一世の多様な姿を明らかにしているが、さらに、その形成に見られる思惑や利害関係の分析にまで踏み込むことで、なぜエリザベスはそうした姿で立ち現れてくるのかを説得力を持って論じている。

そして、上記二点から浮かび上がってくるのは、印刷出版という、当時勃興しつつあったメディアを媒介として、政治、経済、宗教など様々な力がダイナミックにせめぎ合う場としてのエリザベス朝文化の姿であり、この指摘が、文化研究として本論文が示す際立った独創性となっている。

このように、独創的かつ安定した議論を展開する本論文であるが、さらに配慮が求められる点がないわけではない。例えば、古典古代以来の文学的な伝統における女性表象とエリザベスとの関係には本論文の議論と関連付けられる点がさらにあり、先行研究も存在する。具体的には、第五章で『妖精の女王』の登場人物としてエリザベスとの関係において分析されているアマゾンの女王ラディガンドについては、この時代の他のテキストの研究で、古典古代の叙事詩におけるアマゾンの女王や、第一章で言及されている旧約聖書のデボラとの関係が既に指摘されており、これらを参照することによって議論が深められたと考えられる。また、イングランド以外の文学作品等への言及には一層の注意が好ましいと思える箇所もある。しかしながら、こうした問題は、むしろ、新たな研究の可能性を示唆するものであり、本論文の価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2019年9月20日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。